

「8母音」の区別が見出されないという理由によって——、しかし、その起源はもっと古い時期に遡るのではなからうか。

ところで、IIIに示された母音組織からIVのそれへの推移は、体系的観点からすればほんのわずかな変化にすぎない。*/i/*はすでにごくかぎられた範囲でしか現れない母音であったからである。実際、8世紀から9世紀にかけての日本語に、それほど重大な変化を惹き起すような外的要因が存在したとは到底考えられない。少なくとも母音組織に関するかぎり、そこにはいかなる断絶も飛躍も起こらなかった。もし顕著な変化が起こったとすれば、それはただ書記法の面においてだけである。そしてこの変化は、おそらく帰化人(あるいは少なくともバイリンガルな書記階層)の手によって成立したと思われるかなり人工的な書記体系の日本語への漸次的適合、つまり外来文化の土着化の一局面にほかならなかったのである。

結局のところ、「上代特殊仮名遣」の問題は、これまで多少誇張されて取り扱われてきたと言ってよいかもしれない。いわゆる「甲類」・「乙類」の区別が、音韻的、形態論的に多少とも重要性をもつのはイ列の場合だけであって、エ列においてはそれほど重要な意味があるわけではなく、またオ列の場合、甲・

- 1) 音素設定における「経済原則」を重視するならば、IIIの母音組織における*/i/* (= i_2) を、*je* (= e_1) の場合と同様、単一母音としてでなく複合音素と解釈することによって、これを母音組織からとり除くこともあるいは可能であるかもしれない。本章の§2.7において、*/i/*と*/i/*の相違は、音声学的には、たとえば〔Cji〕～〔Cui〕のごときが推定されると述べたが、この〔ui〕を複合音素的な単位と見なすならば、その最初の要素は、音素的には、ワ行子音/w/と同一実体と見なすことも可能だからである。

第二の解釈としては、現代ロシア語におけるたとえば *ми* と *мы* のように、 $i_1 \sim i_2$ の対立を全面的に先行子音 (k g p b m) の音韻的対立と見なすものであって、これもかなり有力である。この解釈に立てば、イ列、エ列の甲・乙の問題は母音のそれではなく、完全に子音の問題に還元され、母音組織としてはIIIの段階を特に想定する必要はなくなるであろう。その代り、今度は子音組織の面で、「前舌母音」 (= i, e) に先行する非前舌子音 (= k g p b m) における口蓋化～非口蓋化 (「拗音」～「非拗音」) の対立」という特性が重要な意味をもって来る。この問題は、しかし、上代語の音韻組織の全般的観点から解決されるべきもので、本稿では子音の問題は一応対象外としているので、これに対する最終的な結論を下すことは留保しておきたい。

乙の区別は全く無視しても構わないし、むしろ無視すべきであろう。オ列に関するかぎり、この区別にとらわれることは、古代日本語の言語構造を正確に把握する上で、妨げにこそなれ、けっして助けにはならないと思われるからである。